

國學院大學學術情報リポジトリ

後漢・朱穆「崇厚論」小論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 克浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000876

後漢・朱穆「崇厚論」小論

宮内克浩

一

朱穆、字は公叔（100～164）は、後漢順帝朝末から桓帝朝に活躍した文人官僚で、「跋扈將軍」梁冀の輔政期間に、その故吏として、梁冀の専權驕侈をしばしば極諫したことで知られる。その一方で、皇帝の寵貴に依拠し朝政に強い影響力を保持した宦官集団に対して、その排斥をも、身命を賭して目指した清流派官僚であって、その言動は、彼の本伝に詳し^①。朱穆は「性は矜嚴」（謝承『後漢書』）とも「肅肅として松柏の下風の如し」（袁山松『後漢書』）とも評される人物であり、宦官に対する徹底的な弾劾が仇となり、却って廷尉に徵詣されて罪を獲、左校署での労役に処されるといふ辛酸を嘗めている。永興元（153）年、朱穆五十四歳のことである。この事件は太学の書生を巻き込ん

での大規模な減刑嘆願運動へと発展し、当時書生であった劉陶らの上書によって朱穆は罪を赦されている。一方、朱穆の文筆活動に関しては、范曄は「著はす所の論・策・奏・教・書・詩・記・嘲、凡そ二十篇」と伝えている（本伝）。文筆面で特に注目すべきは、後漢末期の藝文の領袖たる蔡邕の、朱穆に対する師弟愛に見紛う敬愛である。蔡邕には、朱穆の死に際して、「復た門人と共に其の体行を陳べて、諡して文忠先生と為」し、その論拠を示した「朱公叔諡議」や、「鼎銘」「朱穆墳前方石碑」が残る。蔡邕は「少くして博学、太傅の胡広に師事し」（蔡邕列伝）だが、その文章修行は、朱穆の文章を一言一句書き写すことを通して進められたことを袁山松『後漢書』が伝えている（「穆の著論は甚だ美なり。蔡邕は嘗て其の家に至り、自ら之を写せり」朱穆伝・李賢注所引）。

ところで、朱穆の名を後世の士人に強く記憶せしめることになったのは、いま「絶交論」^②「与劉伯宗絶交書（以下、「絶交書」と略称）」と呼ばれる文章、及び詩一首（以下、「絶交詩」と呼ぶ）に見られる。「絶交」を巡る彼の一連の言説であったと思われる。これらについては、朱穆の次の世代の文人たちに早く言及が見られ、特に蔡邕には、「絶交論」を受けて著した「正交」と呼ばれる文章が伝わる。また直接の言及はないものの、建安年間における軍閥抗争期に臧洪が陳琳に宛てた「告絶」書簡や、魏晋の政権交替期に書かれた嵇康「与山巨源絶交書」などにも影響を与えたものと思われる。さらに『文選』^④等に載録される、六朝梁・劉峻「広絶交論」は、その名の示すとおり、朱穆「絶交論」を敷衍した作品である。これらを考慮に入れるならば、断金と勢利とをその両端として、その間に自らの交際を見定めた後世の士人たちに対し、絶交についての朱穆の言説が、その見定めに際しての一つの論拠を与え続けたであろう。うことは想像に難くない。

さて、絶交を巡っての朱穆の言説に関しては、錢鍾書氏が、「絶交書」に依拠しつつ、これを、勢位を得た故旧との関わり方の問題として論じている。さらに錢氏は、交際と交友とを弁別し、専ら交際を論じた「絶交論」と、それ

を交友の問題に発展させた「広絶交論」と捉えた上で、激越偏宕なる「絶交論」と激越切至なる「広絶交論」とを論じている^⑤。また六朝期の遊戯文学として「広絶交論」を論じた福井佳夫氏の卓説中にも「絶交論」への詳しい言及がある。李賢注に概略の形で伝わる「絶交論」の内容は、管見によれば「崇厚論」によって補い得るものと考えられるが、錢氏・福井氏ともあまり「崇厚論」には触れる所がないようである。従来、「崇厚論」は等閑視されてきた嫌いがあるが、この作品の内容、および問題点を吟味することは、「絶交」を巡る朱穆の言説、ひいては例えば王符『潜夫論』「交際」にみられるごとく、後漢後期に文人の間に盛んになる交友論の検討に資する所があるのではないかとも思われる。いま、先学の卓説に導かれながら、「崇厚論」に関する卑見を披瀝する所以である。

二

「崇厚論」の内容の検討に先立って、初めに絶交を巡る朱穆の言説の中核をなす「絶交論」に触れておきたい。「絶交論」および「崇厚論」の執筆経緯は、本伝に、

○常に時の澆薄に感じ、敦篤を慕尚して、乃ち「崇厚論」を作る。其の辭に曰はく「……」。穆は又た「絶交論」を著す。亦た時を矯むるの作なり。

○論に曰はく、朱穆は比周の義を傷り、偏党の俗を毀つを見て、朋游の私を抑へんと志し、遂に絶交の論を著す。蔡邕以為へらく穆は貞にして孤なりと。又た「正交」を作りて其の致を広む。

と記され、頽廢し「澆薄」となつた時俗に対して、「敦篤」の回復を願ひ、「崇厚論」を、また偏頗な朋党が時俗を頽廢させるとして「絶交論」を作つた、と范曄は執筆動機を説明している。そもそも朱穆の別集が、「隋志」に「朱穆集二卷、録一卷、亡」と記され、隋末には既に亡佚してゐることが知られる。「絶交論」も、本伝の李賢注に、二百三十五字から成る概略が引かれる他、『藝文類聚』（巻21「人部」絶交）に三十四文字、『太平御覽』巻410にその再引が伝わるばかりである。『藝文類聚』の引用箇所は、若干の文字の異同はあるものの、李賢注所引と引用箇所は重複し、唐初において既に概略の形でのみ伝わつてゐたことが窺われる。ここでは李賢注から全文を示し、その内容を確認することとする。各行頭に附けた（X）と（Y）の

記号は、話者の弁別の便を図つて、また、章段の末に付けたアルファベットは、後述の利便を予め図つて、ともに稿者が付けた記号である。問対形式をとる行文であることは、一目瞭然であるが、（X）の部分が客の語で仮設の辭、（Y）が主人、すなわち朱穆本人の語で、本篇の主旨が語られる部分である。この客主の問答形式は、漢賦においては、既に司馬相如「子虛」「上林」賦を頂点とする、苑囿の賦、また班固・張衡らを頂点とする都邑の賦、東方朔・揚雄に始まる、後世「設論」の名で呼ばれる賦の一種、それらの中で定型化されたものである。朱穆の作も、この「設論」形式に拠つて書かれたものであつたと考えられる。

（X）或曰、子絶存問、不見客、亦不答也、何故。

（Y）曰、古者進退趨業、無私游之交。相見以公朝、享会以礼紀。否則朋徒受習而已。

（X）曰、人将疾子、如何。

（Y）曰、寧受疾。

（X）曰、受疾可乎。

（Y）曰、世之務交游也久矣。』A

敦千乘不忌于君、犯礼以追之、背公以従之。其愈者、則孺子之愛也。其甚者、則求蔽過窃誉、以贍其私。事

替義退、公輕私重、居勞於聽也。或於道而求其私、贖矣。』B

是故遂往不反、而莫敢止焉。是川瀆並決、而莫之敢塞、游殫蹂稼、而莫之禁也。詩云「威儀棣棣、不可筭也」。後生將復何述。』C

而吾不才、焉能規此。實悼無行、子道多闕、臣事多尤、思復白圭、重考古言、以補往過。時無孔堂、思兼則滯、匪有廢也、則亦焉興。是以敢受疾也、不亦可乎。』D

(朱穆「絶交論」)

朱穆は、時俗の実態を「事替はり義退き、公軽く私重し」と看破し、「居りては聴に勞す」るほどだと歎声をもらす。

「公・私」の峻別なく、「義」合なき利交が蔓延こる時俗に對して、朱穆は「吾れ不才」にして「能く此を規たす術をもたず「實に無行を悼」むばかりである。そこで「子道には闕くる多く、臣事には尤とかも多」い自分は、自らに失言を戒める『詩』「抑」の詩句を繰り返し口ずさみ、「重ねて古言を考へ、以て往過を補」う所存である。「是を以て敢て疾しみを受くるや、亦た可ならずや」と、周到に自己を卑下し、時俗の誹りに甘んじながら交際を絶つ決意を表明している、ように見受けられる。主客問答体をとつてはいるが、客に主張はなく、主人(朱穆)の真意を引き出す聞き

役に徹している。しかし、前述の通り、これは編集者の改竄によるものであって、客による、委曲を尽くした主張が、3つの(X)のうちのいずれかに本来記されていたであろう。一つ目の(X)中に見える「亦不答也」が、既に問者の主張に基づく問いかけが前提されている表現でもある。また、東方朔「答客難」・揚雄「解嘲」等の例に照らして確かであろう。さらにもう一篇、朱穆「絶交論」を踏まえた作品となつている南朝梁・劉峻「広絶交論」もそれを裏付けるはずである。以下に『梁書』「任昉伝」が引く「広絶交論」を節略してみよう。

(X)客問主人曰、朱公叔絶交論、為是乎、為非乎。

(Y)主人曰、客奚此之問。

(X)客曰、夫草虫鳴則阜螽躍、雕虎嘯而清風起。……而

朱益州汨弊叙、越謨訓、捶直切、絶交遊、視黔首以鷹鷂、嬖人靈於豺虎。蒙有猜焉、請辨其惑。

(Y)主人听然曰、客所謂撫絃徽音、未達燥湿變響。張羅沮沢、不覩鵠雁高飛。蓋……此朱生得玄珠於赤水、謨神睿而為言。……於是素交尽、利交興、天下蚩蚩、

鳥驚雷駭。然利交同源、派流則異、較言其略、有五術焉。……是曰勢交、其流一也。……是曰賄交、其流二

也。……是曰談交、其流三也。……是曰窮交……其流四也。是曰量交、其流五也。凡斯五交、……。然因此五交、是生三覺。……一覺也。……二覺也。……三覺也。古人知三覺之為梗、懼五交之速尤。故王丹威子以檳楚、朱穆昌言而示絶、有旨哉。近世有樂安任昉、海内髦傑、早結銀黃、夙招民譽。……及瞑目東越、屍骸雒浦、總帳猶懸、門罕漬酒之彦、墳未宿草、野絶動輪之賓。藐爾諸孤、朝不謀夕、流離大海之南、寄命瘴癘之地。自昔把臂之英、金蘭之友、曾無羊舌下泣之仁、寧慕邱成分宅之德。嗚呼、世路險巇、一至於此、太行孟門、寧云嶄絶。是以耿介之士、疾其若斯、裂裳裹足、棄之長驚。獨立高山之頂、驩与麋鹿同群、皦皦然絶其零濁、誠恥之也、誠畏之也。
(劉峻「絶交論」)

波線を施した四箇所で朱穆「絶交論」に言及しながら、劉峻は朱穆の絶交を支持する言説を展開している(朱穆の昌言して絶を示すや、旨有るかな)。その一方で、客の言葉に盛り込まれる「朱公叔の絶交論は、是と為すや、非と為すや」との懷疑、また「朱益州は弊なる叙を汨し、謨訓を越え、捶つこと直切、交遊を絶ち、黔首を視るに鷹鷂を

以てし、人霊を豺虎に媲ふ」との批判的言辭は、朱穆の尖锐的な論調に対する当時の士人の偽らざる評価をも示していたであろう。さて、右の二つ目の(Y)「主人听然曰」に始まる主人の言葉に「広絶交論」一篇の主旨が述べられることになるのだが、朱穆が難じた「利交」が、更に「五交」に腑分けされ説明されている。ところでこの分析的叙述に先んじて、まず二つ目の(X)の部分の中略箇所において、「客」が、「蒙に猜ひ有り、請ふ其の惑ひを辨ぜよ」(傍線部)と結ぶ百七十字余りの字数を費やす叙述がある。ここに示される客の言説、すなわち交友の美風に陶醉して、損友の弊害を忘却する客の言説こそ、後続する二つ目の(Y)の箇所において、主人によって論破さるべきものとして、予め劉峻が仮設した主張である。朱穆の「絶交論」の中にも、これに類する叙述が当然あったはずである。では、それはいかなる主張と考えられるのであろうか。

三

朱穆「絶交論」は、後世「設論」と呼ばれる、客主による問対の応酬で一篇が展開するものであり、したがって、まず客によって当今の交際の在り方の一つが示されていた

はずであつた。仮設の客の口を借りて語られるその言説は、建前としては理解できるものであつても、やはり朱穆にとつては受け入れがたく、交際を絶つという結論を導き出すものとなる。それでは、その言説は、どのようなものであつたのか。

この問題の解決のためには、これも「絶交論」と同様に概略なのであるが、蔡邕「正交」を一瞥しておく必要がある。それは、蔡邕「正交」が、「絶交論」の論点を踏まえた上で、その内容を深化（もしくは新たに発展）させて書いた、と范曄が説明する（朱穆伝「論贊」）ことに因る。次に、李賢注（朱穆伝「論贊」）に引かれる「正交」を通して、この点を検討することにした。

聞之前訓曰、「君子以朋友講習、而正人無有淫朋。」是以古之交者、其義敦以正、其誓信以固。逮至周德始衰、頌声既寢、「伐木」有鳥鳴之刺、「谷風」有棄予之怨、其所由来、政之缺也。自此已降、弥以陵遲、或闕其始終、或強其比周。是以搢紳患其然、而論者諄諄如也。疾淺薄而携式者有之、惡朋党而絶交游者有之。其論交也曰、富貴則人争趣之、貧賤則人争去之。是以君子慎人所以交已、審已所以交人、富貴則無暴集之客、貧賤則無棄

旧之賓矣。故原其所以来、則知其所以去。見其所以始、則觀其所以終。彼貞士者、貧賤不待夫富貴、富貴不驕乎貧賤、故可貴也。
（蔡邕「正交」）

古の交際の敦厚は、聖賢の前訓（『易』『書』）に窺われる通りである。しかし、その敦厚が失われると、それが歌声のうちに現れる（周徳始めて衰ふるに逮および至んで、頌声既に寢み、「伐木」に鳥鳴の刺り有り、「谷風」に棄予の怨み有り）。これは王道政治の衰退に伴う時俗の頹廢が原因である。まずこのように蔡邕は、『詩』小雅「伐木」「谷風」兩篇を例証に挙げて述べる。時俗の頹廢につれて友道も頹廢の一途を辿るわけであるが、その風潮を憂慮して、この問題に関する議論が活発となった（此より已降、弥いよ以て陵遲し、或いは其の始終を闕き、或いは其の比周を強くし、是を以て搢紳其の然るを患へて、論者諄諄如たり）。ここに「淺薄を疾みて携式する者」「朋党を惡みて交游を絶つ者」、つまり相手の友情の淺薄を憂えて仲違ちがひする者と、他者との交際そのものを絶つ者という、主張を異にする二人が議論することになった、と述べる。蔡邕は、以下のように自身の見解を交えながら解説を続ける。

当今の交際は、「富貴なれば則ち人争つて之に趣き、貧

賤なれば則ち人争つて之を去る」、いわゆる勢利之交であり、よつて君子たる者には、「人の己れに交はる所以を慎しみ、己れの人に交はる所以を審らかにす」ることが求められる。これは友情の始まりを観察すれば、自ずとその結末は知られるから、富貴となつた自分に急に接近してくる者も、逆に貧賤に陥つた自分を見棄てる薄情者とも無縁でいられる（富貴には則ち暴集の客無く、貧賤には則ち棄旧の賓無し）。この点を考えれば、「彼の貞士なる者」、すなわち「朋党を惡みて交遊を絶つ者」は、ご立派の一言に尽きる（貴ぶべし）。なぜなら、貧賤に陥つても富貴者であつてにせず、富貴を得ても貧賤者を蔑まない（貧賤にして夫の富貴を待たず、富貴にして貧賤に驕らず）からである。ただし、これは交遊を絶つ故の必然ともいえる。

さて利交はびこる世にあつて、人との交際を断ち切つて生きてゆく（貞にして孤）ならば話はそこまでである。しかし、あくまで朋友の道を維持するのであれば、義に依拠する他はない（蓋し朋友の道は、義有れば則ち合し、義無くんば則ち離る）。蔡邕は、次いで「浅薄を疾みて携式する者」の立場から、その交友の維持について以下のように述べている。

蓋朋友之道、有義則合、無義則離。善則久要不忘平生之言、惡則忠告善誨之、否則止、無自辱焉。故君子不為可棄之行、不患人之遺己也。信有可歸之德、不病人之遠己也。不幸或然、則躬自厚而薄責於人、怨其遠矣。求諸己而不求諸人、咎其稀矣。夫遠怨稀咎之機、咸在乎躬、莫之能改也。子夏之門人間交於子張、而二子各有聞乎夫子。然則以交誨也。商也寬、故告之以距人、師也褊、故訓之以容衆、各從其行而矯之。至於仲尼之正教、則汎愛衆而親仁、故非善不喜、非仁不親、交游以方、會友以文、可無貶也。穀梁子亦曰、「心志既通、名譽不聞、友之罪也。」今將患其流而塞其源、病其末而刈其本。無乃未若挾其正而黜其邪。与其彼農皆黍而獨稷焉。夫黍亦神農之嘉穀、与稷並為黍盛也。使交而可廢、則黍其愈矣。（蔡邕「正交」）

相手が善ならば問題はないが、「悪なれば則ち忠告して善く之を誨へ」、それで改まらなければ、それ以上は働きかけなければ「自ら辱しむることも無^い」。したがって、義を交友の軸に据える以上、君子には朋友から見棄てられる行動をとるうはずはないが、人が自分の元から去つてゆくことも憂えることのないのである（故に君子は……信に

帰すべきの徳有りて、人の己を遠ざくるを病まざるなり。不幸にも朋友が自分から遠ざかるようなことがあつても、「これを己に求めてこれを人に求め」ないことで、「怨・咎」を遠ざけられる。つまり「遠怨稀咎の機は、みな躬に在りて、之を能く改むる莫き」ことが要諦となるはずである。かく『論語』子張篇および『穀梁伝』の記事などを引いた上で、ひとまず「浅薄を疾みて携式する者」の主張に対して結論をつける。すなわち絶交は「其の流を患へて其の源を塞ぎ、其の末を病みて其の本を刈」つてしまおうとする粗っぽいやり方である。それならば義で節し、「其の正を択んで其の邪を黜」ける方が勝る。このように「浅薄を疾みて携式する者」の主張に修正を加えた上で、一理あることを示している。蔡邕は両者の主張を「薄きを刺る者は博くして洽なく、交はりを断つ者は貞にして孤なり」と総括した上で、最後に自分の立場を表明することとなる。

括二論而言之、則刺薄者博而洽、断交者貞而孤。孤有羔羊之節、与其不獲已而矯時也、走将徒夫孤焉。

(蔡邕「正交」)

蔡邕は、潔白な節義を守る「孤」高(孤に羔羊の節有り)を選ぶ旨を述べて締めくくっている(其の己むを獲ずして

時を矯めん与りは、走は將に夫の孤に従はんとす)。ところで、ここに示される「貞にして孤」という、世俗との向き合い方こそ、朱穆が「絶交論」の中で次のように述べている(前項「絶交論」末尾Dの箇所) ことと符合する。

吾れ不才にして、焉くんぞ能く此を規さんや。実に行無きを悼む。子道は闕けたること多くして、臣事は尤多し。白圭を復せんことを思ひ、重ねて古言を考へ、以て往過を補はん。時に孔堂無く、兼ねんことを思へば則ち滞り、廢すること有るに匪ずんば、則ち亦た焉くんぞ興らん。是を以て敢て疾しみを受くるや、亦た可ならずや。

(朱穆「絶交論」末尾D)

朱穆は、来し方の臣・子としての至らなさを認め、世の誹りを甘んじて身に受けて、交際を一たび「廢す」る旨を述べる。しかし、朱穆が潔く受ける「廢」辱は、類「廢」を意味しないであろう。「白圭を復」誦しつつ「重ねて古言を考」える道徳実践の果てに再「興」を期するものである。それは謙退を装いつつ「貞」廉を保持して「孤」を守る己れの覚悟と矜持とを示すものでもある。かくして蔡邕の「正交」を通して、朱穆の「絶交論」が、相対立する二つの主

張（時俗の淺薄の下、「朋党を惡みて交游を絶つ・貞にして孤」なるべきか、それともそれとは異なる在り方を選ぶのか）を提示して、両者が論を尽くした上で、最終的に絶交を選ぶ形をとる文章となっていたであろうことが分かる。では、現存する「絶交論」中からは削り落とされてしまった、朱穆が自身で否定する絶交以外の在り方とは、もはや窺うすべがないのであろうか。実は、いま「崇厚論」と呼ばれるその文章の中に断片的に窺われると考えられる。項を改めて論を進めたい。

四

范曄が、朱穆の「崇厚論」執筆の動機について、頽廢した時俗に対する朱穆の矯直の意図を汲み取っていたことは先に触れた。言うなれば、浮薄な時俗の中で、人はどう他者とかかわるべきかを論じた文章のようである。初めに范曄が本伝中に引く「崇厚論」を四段に分けて全文を引用して、概要を確認した後に、問題点を検討することにした。冒頭部は以下のように書き出される。

夫俗之薄也、有自来矣。故仲尼歎曰、「大道之行也、

而丘不与焉。」蓋傷之也。夫道者、以天下為一、在彼猶在己也。故行違於道則愧生於心、非畏義也。事違於理則負結于意、非憚礼也。故率性而行謂之道、得其天性謂之德。德性失、然後貴仁義。是以仁義起而道德遷、礼法興而淳樸散。故道德以仁義為薄、淳樸以礼法為賊也。夫中世之所敦、已為上世之所薄。況又薄於此乎。』E
（朱穆「崇厚論」）
劈頭、天性が人心に十分に發露した「純樸」「徳性」が發揮されていた「上世」、続いてそれらが失われて「仁義」「礼法」を必要とされた「中世」、さらにその「仁義」「礼法」すら力を失った近世に至る、時俗頽廢の経過を、儒説に『老子』の所説を交えながら説明する。では、頽廢へと突き進む当今の時俗に対して、人はそれとどう向き合うべきか。おそらく問題をそう設定した上で、その解決に「敦龐」（敦厚）を挙げ、次のように記す。

故夫天不崇大則覆幬不広、地不深厚則載物不博、人不敦龐則道數不遠。昔在仲尼不失旧於原壤、楚嚴不忍章於絶纒。由此觀之、聖賢之徳敦矣。老氏之經曰、「大丈夫処其厚不処其薄、居其实不居其華。故去彼取此。」夫時有薄而厚施、行有失而惠用。故覆人之過者、敦之

道也。救人之失者、厚之行也。往者馬援深昭此道、可
以為德、誠其兄子曰、「吾欲汝曹聞人之過如聞父母之名、
耳可得聞、口不得言。」斯言要矣。遠則聖賢履之上世、
近則丙吉・張子孺行之漢廷。故能振英声於百世、播不
滅之遺風。不亦美哉。」F
(朱穆「崇厚論」)

「崇大」「深厚」なる天地に人が参伍するのは、「敦厯」
なる心の發揮であり、それなくしては道数(道の精理)に
通ずることは覺束ない。故旧の原壤を遺れなかつた孔子、
冠纓を絶たれた者に寛大な措置をとつた楚の昭王の振舞
い、聖賢に数え上げられる二人の徳行が実例であり、さら
に大丈夫たるもの「厚」「実」に居り、「薄」「華」を去れ
と説いた老子の言葉がそれを裏付ける、とする。澆「薄」
な「時」俗に「厚く施」し、他人の「行」動の「過」「厚」の
対して「恵み用」いる、これが人にとつての「敦・厚」の
道である。さればこそ「人の過ちを覆」い「人の失を救」
おうとした後漢・馬援や前漢の丙吉・張安国の言行は、「英
声を百世に振ひ、不滅の遺風を播」き得る、と高く評価す
るのである。ここでは、軽薄な時俗では、人間の言行は過失・
惡へと傾斜するのは既に自明として、そのこと自体は不問
に付し、他者の過失に対して、己れがどう対処すべきかを

問題としている。「崇厚論」の語り手は、「過ちを掩ひ善を
揚げ」(「漢書」丙吉伝)、「人の過失を隠し」(同・張安世伝)、
さらに他人の過失は「口に言ふを得ず」(馬援の遺誡)と
の態度を美德として寛裕溫柔を求める。ここには他者の悪
行を善導する自己の積極的な働きかけはなく、蔡邕が「朋
友の道……惡なれば則ち忠告して善く之を誨へ、否せずん
ば則ち止む」(正交)と提示しているのとは異なっている。
これに続けて、次のように記されている。

然而時俗或異、風化不敦、而尚相誹謗、謂之臧否。記
短則兼折其長、貶惡則并伐其善。悠悠者皆是、其可称乎。
凡此之類、豈徒乖為君子之道哉。将有危身累家之禍焉。
悲夫。行之者不知憂其然、故害興而莫之及也。斯既然
矣、又有異焉。人皆見之而不能自遷。何則務進者趨前
而不顧後、榮貴者矜己而不待人。智不接愚、富不賑貧。
貞士孤而不恤、賢者扈而不存。故田蚡以尊顯致安国之
金、淳于以貴執引方進之言。夫以韓・翟之操為漢之名
宰、然猶不能振一貧賢、薦一孤士。又況其下者乎。此
禽息・史魚所以專名於前、而莫繼於後者也。

故時敦俗美、則小人守正、利不能誘也。時否俗薄、雖
君子為邪、義不能止也。何則先進者既往而不反、後來者

復習俗而追之。是以虚華盛而忠信微、刻薄稠而純篤稀。斯蓋谷風有「棄予」之歎、伐木有「鳥鳴」之悲矣。』¹⁰G

(朱穆「崇厚論」)

時俗が改まり、敦美でなくなると、時流は誹謗中傷ばかりが目立つようになり、短所はまだしも、他人の長所までもが批判の対象に変わる。「崇厚論」の語り手は、それまでの論調から一転して、このように時俗の頹廢後の、人々の交際の在り方の変化について語り始める。このケースでは：、と不自然なことわり方をした上で、ただ「君子の道にぞむくのみ」ばかりでなく「危身累家の禍」が潜んでいると警告する。行為者自身がその危うさを認識できないので、禍が現実のものとなっても、もはや手の打ちようがない。しかし、問題はここに留まらない。周囲の者たちも人の振り見て我が振りを正すことがなく、事態が深刻化していく。「何となれば則ち、進まんと務むる者は前に趨りて後へを顧み」ないものであるし、「貴きを榮とする者は己をほこりて人を待」遇しない。「智あるものは愚に接」触しようとせず、「富めるものは貧しきものを賑」わす気など毛頭ない。ここに「貞士は孤にして恤れまれず、賢者扈にしていたはれ」ざる現実が生まれるのである、とする。かくして「貞士の孤」立という事態に対しては、名宰相と

謳われた韓安国や翟方進すら一顧だにしなかったのであるから、「又た況んや其の下なる者をや」というわけである。これこそ賢人の推挙に身を賭した禽息・史魚の美風の断絶を意味するものである（此れ禽息・史魚の名を前に専らにすれども、後に継ぐもの莫き所以の者なり）。

語り手はこう書き綴ったのちに、次のように論を収束に向かわせる。すなわち、時俗が敦厚ならば、小人すら正を守つて勢「利」で動かないが、澆薄になると、君子でさえも邪に傾き、「義」も制止が効かなくなる（時敦く俗美なれば、則ち小人は正を守り、利も誘ふ能はざるなり。時否にして俗薄ければ、君子と雖も邪を為し、義も止むる能はざるなり）と。

さて、一読して気づくことは、このように結論づけるのであるならば、この章段の冒頭「然而時俗或異、風化不敦」（二重傍線部）より前の箇所には、小人すら邪に流れない時俗の敦美が記されていないはずである。つまり、そこには、二つ前の章段Eに見た、上世の淳僕とは異質ではあれ、「仁義」「礼法」により敦厚な時俗が実現されていた中世の交際のありさまが記されていないはずではないはずである。それを受ける形でここGの章段で、その仁義礼法すら失われた近世の時俗への推移が述べられてい

るのである。しかし、この章段の一つ前のFでは、中世の敦厚は語られない。そればかりか、「時₁有薄而厚施」(Fの傍線部)、時俗が刻薄であれば、恩恵を施すべきだととして、時俗を敦厚の道で矯め直すことへの樂觀的期待、端的に言えば、他者の過失を寛裕な心で庇うべきである旨が述べられて、文脈が全く絡がらない。奇怪なことに、同じ語り手によって、ここGでは、澆薄な時俗は義による抑止も効かず、敦厚の道の実践者(先進)は「既に往きて反らず」、後進の者が時俗の刻薄を習いとしてそれに追従している。そこに「忠信」「純篤」の根付く余地はなく、「虚華」「刻薄」が蔓延こるばかりだと悲觀的に結んでいるのである。つまり、同一の語り手によって立論の異なる主張が接がれているわけである。そして両者の矛盾に全く折り合いが付けられぬままで、楚辞でいえば乱辞にあたる次段に続けられ、一篇がまとめられているのである。

嗟乎、世士誠躬師孔聖之崇則、嘉楚嚴之美行、希李老之雅誨、思馬援之所尚、鄙二宰之失度、美韓稜之抗正、貴丙・張之弘裕、賤時俗之誹謗、則道豐績盛、名顯身榮、載不刊之德、播不滅之声。然(後)知薄者之不足、厚者之有餘也。彼与草木俱朽、此与金石相傾。豈得同

年而語、並日而談哉。』H (朱穆「崇厚論」)

篇末では、一篇の内容を総括し、酷薄を去り敦厚・寛容に努めるべきである、と述べる。その実践によって身は榮え、功績は顕れ、「不刊」「不滅」の徳望を得ることになる。彼の「薄者」は「草木と俱に朽ち」、此の「厚者」は「金石と相傾」くことが期待され、酷薄と敦厚は同日の談ではないと結んでいる。この件りは、二つ前のFの論調を受け継ぐものであり、語り手は、人との交接における、過失を庇い、厚く施す道を再び力説して、「崇厚論」の名に添った内容で一篇を締めくくっている。

さて、立論の立場を異にする二つの論調が交互に現れてくる矛盾は、どう考えるべきであろうか。それは、論と名付けられてはいるものの、例えば王符『潜夫論』『交際』のように、一人の視点で論が展開しているのではなく、語り手が二人混在することに因るはずである。この点に関して項を改めて少し整理することとしたい。

五

前項で触れたFとGとの接合の不具合、さらにHに登場

する人物の不具合については、早くからその指摘がある。まず、後者の、Hに挙げられた人物について。ここには傍線を施した孔子・楚の莊王・老子・馬援・丙吉と張安世がFから集められている。一方、Gからは波線を施した二宰（韓安国と翟方進）と時俗が取り上げられている。二重傍線を付けた韓稜はFにもGにも言及がなく、ここに名が挙がるのは全く不自然である。この点に関して、沈欽韓は「美韓稜之抗正」に関して「本篇中に韓稜が見えないのは、この論が既に范曄によって削られてしまったが、偶々篇末に韓稜の語を残してしまった編集ミス（按韓稜不見篇中、蓋此論已被范史刊削、偶漏韓稜一語於篇末。宋祁修唐書、亦露此醜）と指摘（『後漢書疏証』卷四）し、惠棟も、上文に韓稜の事に言及していないので、確実に脱落があるはずであるが、『朱穆集』は亡佚しているのは正しようがない（案上文、未及稜事、必有缺。朱穆集已亡、無從是正）と述べている（『後漢書補注』卷十一）。沈欽韓の言うような、范曄が修史の際に落としたか否かは、もはや判断のしようがないが、二人の言及にさらに一つ加えるならば、「韓稜之抗正」という表現は、この文脈では適切を欠くであろう。彼の事績は『後漢書』韓稜伝（列伝35）に詳しい。韓稜は、郡吏であった時に、病気で政務が執れなくなった郡太守の

ために密かに太守の職務を代行した人物である。しかし摘発を受けて禁固刑が確定するが、その期に及んでも韓稜は太守の病は口外せずに隠匿した人物として知られる。その点において、この文脈に彼が名を連ねるのは誤りではないが、韓稜の「抗正」とは、和帝朝初期に外戚として専横を極めた竇憲に対する、彼の徹底的対抗を指す。したがって敦厚・寛裕を説く件りでは「韓稜の抗正を美みず」とは、朱穆は絶対に言わないはずなのである。さらに付言すれば「論贊」に「（韓）稜・（周）榮は、君に事ふるに、志、鷓雀に同じ」と称えられる。帝に礼無き者を見ては之を誅する姿勢が鳥雀を逐う鷹鷂を思わせることを言うが、不寛容ともとれるこの態度を賛美するのは、「絶交論」の文脈においてこそ相応しいものである。これは前項の二に引いた劉峻「広絶交論」に「朱益州……視黔首以鷹鷂、媿人靈於豺虎」と言及されることも照応しよう。

ついで、FとGとの接合の不具合について、用字法の点から、この点を指摘した意見がある。G冒頭部の二重傍線部「然而時俗或異、風化不敦、而尚相誹謗」に対して、劉敞は下に「而」があるのだから、「然而」の「而」は使うべきではない（案下文有「而」字、則然字下不宜更用「而」字）と指摘している（『東漢書刊誤』）。これらを踏まえ、さら

に本篇が脚韻を排する賦体であること⁽¹⁾。また、立論の立場が異なる二つの論調が混在しているが、本篇が本来は主客問答体をとる「設論」形式で記されていて、主客二人の言説があつたであろうこと。さらに「絶交論」(前項二のD)の二重傍線部「求敵過窃誉、以贍其私」が「崇厚論」Fの二重傍線部「覆人之過者、敦之道也。救人之失者、厚之行也」に対応し、寛容を説く客の論(後者)に対して、不寛容もしくは絶交の論を展開する(前者)こと。これらを勘案すると、もとの「絶交論」は後人によって分断され組み替えられ接合されて、一部がいま伝わる「崇厚論」として伝わっているのではあるまいか。つまり、本来は「絶交論」の主旨を引き出すために「覆人之過・救人之失」を説く、客人の言説(FおよびH)が、後人の手によって切り離され、絶交を説く主人の言説の一部と組み合わされて、一篇が作り上げられた。それがいま范書に残る「崇厚論」と呼ばれるテキストなのではあるまいか。このように考える余地があるのであれば、次は「絶交論」本文をいくらかなりとも復元することを通して、「絶交書」また「絶交詩」との、あらたなる関係性を伺うことが課題となるが、それは後考に俟つこととして擱筆することとしたい。

注

(1) 范曄「後漢書」朱楽何列伝第三十三「朱暉伝」附「朱穆伝」および李賢注(中華書局・標点本)。以下、范書の引用は『後漢書』と記し、范書である旨を記さない。本文の訓読については吉川忠夫氏訓注『後漢書』(岩波書店)、渡邊義浩氏主編『全譯後漢書』(汲古書院)の当該箇所を参考にさせていただいた。

(2) いま「絶交論」と呼ばれる作品名は、後人によって附けられたものであり、次項注(3)に見る通り、蔡邕の作が「正交」と呼ばれたように、もとは「絶交」もしくは「絶交之論」などと呼ばれたと思われる。しかし、行動としての「絶交」と作品名との混同を避けるために、拙稿では「絶交論」と記すことにする。

(3) 孔融「論盛孝章書」(『文選』卷41)は、孔融が盛孝章の救済助命を曹操に働きかけた文章であるが、その文章中に「吾祖不當復論損益之友、而朱穆所以絶交也……」と見える。また蔡邕については、「朱穆伝」の論贊に「論曰、朱穆見比周傷義、偏党毀俗、志抑朋游之私、遂著絶交之論。蔡邕以爲穆貞而孤、又作正交而広其致焉」とあり、朱穆のこの作品が蔡邕「正交」執筆の主要因になっている。

(4) 『文選』卷53、また『梁書』卷14「任昉伝」・『南史』卷59「任昉伝」など。

(5) 錢鍾書氏「管錘編」〔全上古三代秦漢三國六朝文〕第43則。

一九七九年、中華書局。

(6) 福井佳夫氏「劉孝標「広絶交論」論」〔六朝の遊戯文学〕

二〇〇七年十月、汲古書院。

(7) 「広絶交論」の主旨が「朱穆昌言而示絶、有旨哉」と締めくくられたあともなお、劉峻は言辞を連ねている。亡くなった任昉から受けた恩義を忘れる薄情な輩への痛烈な批判（二重傍線部）「近世有樂安任昉」以下）がそれである。筆致は篇末に近づくにつれて険しさを増し、二つ目の二重傍線部「嗚呼」以下、四言句を基調とする十三句から成る慨嘆の辞が綴られている。この展開は、朱穆「絶交書」および「絶交詩」との照応を思わせるが、ここではその指摘に止どめ、それ以上の詮義は行わない。

(8) 以下、(11)に至るまで、該当する「崇厚論」の書き下し文を示す。夫れ俗の薄きや、丘は焉に与らず」と。蓋し之を傷むなり。夫れ道はるるや、丘は焉に与らず」と。蓋し之を傷むなり。夫れ道なる者は、天下を以て一と為し、彼に在りて猶ほ己に在るなり。故に行ひ道に違はば、則ち愧^は心に生ずるは、義を畏るるに非ざるなり。事理に違はば、則ち負^は意に結ぶは、礼を憚かるに非ざるなり。故に性に率ひて行ふ、之を道と謂ひ、其の天性を得る、之を徳と謂ふ。徳性失はれて、然る後に仁義を貴ぶ。是を以て仁義起りて道徳遷り、礼法興りて淳樸散ず。故に道徳

は仁義を以て薄しと為し、淳樸は礼法を以て賊と為すなり。夫れ中世の敦しとする所は、已に上世の薄しとする所と為る。況んや又た此より薄きをや。

(9) 故に夫れ天は崇大ならざれば則ち覆轡すること広からず、地は深厚ならざれば則ち物を載すること博からず、人は敦厯ならざれば則ち道数遠からず。昔在 仲尼は旧みを原壤に失はず、楚敵は絶繩を章らかにするに忍びず。此に由りて之を觀れば、聖賢の徳教し。老氏の経に曰はく、「大丈夫 其の厚きに処りて其の薄きに処らず、其の実に居りて其の華に居らず。故に彼を去りて此を取る」と。

夫れ時には薄ければ而ち厚く施すこと有り、行ひには失へば恵み用ふること有り。故に人の過ちを覆ふ者は、敦の道なり。人の失を救むる者は、厚き行ひなり。往者に馬援は深く此の道を昭らかにし、以て徳と為すべしとし、其の兄の子を誡めて曰はく、「吾れ汝が曹の人の過ちを聞くこと父母の名を聞くが如くならんことを欲す。耳聞くを得べきも、口言ふを得ず」と。斯の言要なり。遠きは則ち聖賢之を上世に履み、近きは則ち丙吉・張子孺之を漢廷に行へり。故に能く英声を百世に振ひ、不滅の遺風を播けり。亦た美ならずや。

(10) (然り而して) 時俗或いは異なり、風化敦からず、(而して) 尚ほ相誹謗して、之が臧否を謂ふ。短を記せば則ち兼ねて其の

長を折り、悪を貶すれば則ち并せて其の善を伐ふ。悠悠たる者皆是れなり、其れ称ぐべけんや。凡そ此の類、豈に徒だに君子の道に乖くのみならんや。將に危身累家の禍有らんとす。悲しいかな。之を行ふ者其の然るを憂ふるを知らず、故に害興りて之に及ぶ莫し。斯れ既に然り、又た焉に異なる有り。人皆之を見て自ら遷す能はず。何となれば則ち進を務むる者は前に趨りて後へを顧みず、榮貴なる者は己を矜りて人を待たず。智は愚に接せず、富は貧を賑はさず。貞士は孤にして恤れられず、賢者尼にして存はれず。故に田蚡は尊頭を以て安国の金を致し、淳于是貴執を以て方進の言を引く。夫れ韓・翟の操の漢の名宰と為るを以てすら、然も猶ほ一貧賢を振はし、一孤士を薦むる能はず。又た況んや其の下なる者をや。此れ禽息・史魚の名を前に専らにして、而も後に繼ぐ莫き所以の者なり。

故に時敦く俗美なれば、則ち小人は正を守り、利も誘ふ能はざるなり。時否にして俗薄ければ、君子と雖も邪を為し、義も止むる能はざるなり。何となれば則ち先に進む者は既に往きて反らず、後に來たる者は復た俗に習ひて之を追へばなり。是を以て虚華盛んにして忠信微なり、刻薄稠くして純篤稀なり。斯れ蓋し「谷風」に棄子の歎有り、「伐木」に鳥鳴の悲有り。

(11) 嗟乎、世士誠に躬ら孔聖の崇則を師として、楚敵の美行を嘉みし、李老の雅誨を希み、馬援の尚ぶ所を思ひ、二宰の失度を

鄙しみ、韓稜の抗正を羨みし、丙・張の弘裕を貴び、時俗の誹謗を賤しめば、則ち道は豊かにして績は盛、名は顯はれて身は榮え、不刊の徳を載せ、不滅の声を播かん。然る〔後に〕薄き者の足らず、厚き者の余り有らんことを知るなり。彼れ草木と俱に朽ち、此れ金石と相傾かん。豈に同年にして語り、並日にして談ずるを得んや、と。

(12) 例えば、「崇厚論」G末尾、「是以虚華盛而忠信微、刻薄稠而純篤稀。斯蓋谷風有棄子之歎、伐木有鳥鳴之悲矣」の×印を付けた文字は、『漢魏晉南北朝韻部演變研究』（羅常培・周祖謨兩氏合著・中華書局、二〇〇七年）に拠れば、漢代ではみな「脂」部に所屬するとされる。「崇厚論」が、もと「絶交論」の一部であつたと考えられ、その「絶交論」が脚韻を排する賦体であつたと考える点、拙稿は福井氏前掲（6）論文と見解を異にする。

(13) 例えば「崇厚論」G末尾「故時敦俗美、則小人守正、利不能誘也。時否俗薄、雖君子為邪、義不能止也。何則先進者既往而不反、後來者復習俗而追之。是以虚華盛而忠信微、刻薄稠而純篤稀。斯蓋谷風有棄子之歎、伐木有鳥鳴之悲矣。」の傍線部と「是以虚華」との間には、「絶交論」のCの箇所「（是故遂）往不反、而莫敢止焉。是川瀆並決、而莫之敢塞、游獵蹂稼、而莫之禁也。詩云（威儀棣棣、不可筭也。）後生將復何述」の二重線部以下が入るのではあるまいか。つまり、もと「絶交論」の中では「故時敦俗美、則小人

守正、利不能誘也。時否俗薄、雖君子為邪、義不能止也。何則
先進者既往而不反、後來者復習俗而追之、莫敢止焉。是川瀆並決、
而莫之敢塞、游豮蹂稼、而莫之禁也。詩云、威儀棣棣、可筭也。後
生將復何述。是以虛華盛而忠信微、刻薄稠而純篤稀。斯蓋谷
風有棄予之歎、伐木有鳥鳴之悲矣。」であつたのではあるまいか。
すると、詩云「威儀棣棣、可筭也」とは、「時敦俗美、則小人守正、
利不能誘」なりし中世の美風を回想したものであり、それが近
世（後世）にはもはや望むべくもなくなつてしまつた、との文
脈の中に置かれたものとして考えられるのではあるまいか。こ
のように考えることによつて渡邊氏前掲（一）書の当該箇所（列
伝（四）「一九〇頁）において指摘された、文脈との不致も解
消されうるように思われる。

〔キーワード〕朱穆、「崇厚論」、「絶交論」、蔡邕「正交」、劉峻「広
絶交論」